

「財務維新」がクラウド化 金融機関との会計連動でフィンテック推進

会計事務所を母体としたソフトウェアベンダーで知られる、(株)YKプランニング(山口・防府市、代表取締役=行本康文氏)が販売する「財務維新」をベースとしたクラウドサービス「bixid(ビサイド)」がこのほど誕生し、業界内で早くも話題になっている。

会計ソフトの仕訳データを一元化し、会計業務の効率化と付加価値創造を支援するツール「財務維新」は販売から約6年を経過。全国約450会計事務所が導入するなど、ユーザー層を拡大している。

今回の新サービスは、同社と金融機関向けシステム開発会社である(株)電通国際情報サービス(東京・港区)との業務提携が契機となった。「財務維新」の心臓部で最大の特徴である“会計データの標準化”に電通国際情報サービスが着目。企業の決算書や試算表の情報を電子データ化して金融機関に提供する新たなビジネスモデル、いわゆるフィンテック化に向けたサービスを提供しようというもので、それを

実現させるためには、「財務維新」のクラウド化が必須となっていた。従来、紙ベースで行っていた金融機関の資料収集やデータ入力等の作業効率化で双方の利便性が高まると期待されており、今秋には複数の金融機関で「bixid」を通じた決算書データの受け取りが開始される予定という。

また、「財務維新」のクラウド化により、順次機能アップが図られ、会計データの連携をはじめ、分析診断と自動化された日常の報告、経営計画とモニタリング、経営シミュレーションゲーム等のサービスや機能が付加される予定。これまで、各事務所がローカルで使用していたソフトの機能をパワーアップさせ、財務会計および経営計画の“大衆化”という新たな路線が目標となっている。

「財務維新」のユーザーであれば「bixid」の機能によって、会計事務所がクラウド経由で顧問先企業の会計データを「財務維新」にダウンロードし、監査を行うことも可能という。会

計事務所側でも、会計データ連携機能を活かすことで、ソリューション・ツールとしても使える。「財務維新の技術を使えば同じ形式のデータとなることから、インターフェイスは一つで済

む。「bixid」を共有することによって生まれる社会コストの低減の実現を目指したい」(YKプランニング取締役営業本部長の岡本辰徳氏)としている。